
鏡界線上の向こう側 第1章

— —

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡界線上の向こう側 第1章

【Nコード】

N9034N

【作者名】

一一一

【あらすじ】

神崎 聖は不思議な夢を見て目が覚める。

その夢を不思議に思いながらも親友の御加倉命と京野智香と共に楽しい学校生活を送っていた。

そんな時聖は現実ではありえない事態に遭遇する。

それを助けてくれたのは一人の男子生徒だった・・・

日常（前書き）

初めまして、初めて小説を投稿させていただきます。

かずいち はじめ
一一 一と申します。

始めて小説を書くので、いろいろと表現がまとまらない部分がありますが、最後まで読んでいただければ幸いです。

なにか感想やご指摘があれば遠慮なくお願いします。

日常

まどろみの中、目を醒ました。

目を開くがそこは何もなく、なにも見えなかった。

光も影も、自分の存在すらもわからなくなるほどの真の闇が広がっていた。

いつ、どこで、なにを間違えたのだろうか。

なにを、どうすればよかったのだろうか。

そう思う内に再び襲ってきたまどろみの中に引きずり込まれていた。

鏡界線上の向こう側

夢を見ていた。

私は暗い、暗い暗闇の中にいた。

そこには大きな姿見の鏡が一つ

そして私はそこに立ち鏡にうつる私を見た。

ショートヘアーの脇に髪留めをした細身の体つきの少女が写り込んでいた。

そしてその少女の左眼には眼を覆うように白い眼帯がしてあった。

これが私の全て

私は左眼を覆っていた眼帯を外して私を見た。

光のない左眼は合わせ鏡のように反射し、左眼の中に無数の私がい

た。

そんな時、鏡の向こう側の私が笑みを浮かべた。

その笑みは元気な少年のような笑みだった。

あなたは・・・誰？

私の姿をした元気なその人は、鏡ごしに私に向かって手を伸ばしてきた。

いっしょに行こう。

そう言われているような気がした。

私でもあんな笑顔ができるかな

そう思いながら私はその人の手を掴んだ。

ふと目が覚めた。

私事、神埼聖は天井に向かって手を伸ばしていた。

「夢・・・」

時計を見るとまだ午前5時、朝起きるのは少し早い時間だった。

「なんか変な夢だったな」

鏡の向こうの自分ではない自分

私もあんな元気な笑顔ができるのだろうか・・・

枕元に置いてあった手鏡を見て笑顔を浮かべてみた。

・・・笑顔がぎこちなかった。

「だめだ」

苦笑する。

まだまだ理想の私には程遠いらしい

左眼を見た。

そこには鏡の様な左眼が私の姿を映し出していた。

この眼になったしまったのは、子供ころにあった交通事故のせいだと聞かされている。

ものすごい事故だったらしく、私の両親もその事故で亡くなったらしい。

らしいというのはそのもの自体記憶にないから。

事故について実感があるのはこの左眼の後遺症だけ。

両親と共に事故にあい、命は助かったもののその変わり左目の網膜が鏡のように変化し同時に視力も失われた。

医者にも診せたらしいが原因不明で事故の後遺症と診断されるだけだったらしい。

左眼の視力がないのは私には当たり前だと思っていたし、普通に生活するには何も不自由しなかった。私にはまだ右見が残っていたんだから多少視力が衰えたって問題なく過ごしていた。

でも、私の眼はよくても、他人つまり世間の眼が私を嫌った。

いろいろないじめられたり、嫌われたりした。

しかし私は立ち向かった、けんかもした。

そうしたらいつの間にか学校で変な呼び名が出来ていた。

“番長”

友達いわく私はケンカになると口調が変わり男勝りになりカッコよくなるらしい。

カッコよくって、私これでも女なんですけど・・・

そんな訳で中学卒業を期に女子高校生らしく学校生活を過ごそうを決意した矢先に入學式でトラブルに巻き込まれ、それを解決したことによってつけられたあだ名がそれはまた男勝りなあだ名で・・・

「はあゝ」

思わずため息が出てしまいます。

少し部屋で時間をつぶしてから、身支度を済まして部屋からリビングに降りて行くと叔母さんが朝ご飯の準備をして、伯父さんがテーブルで新聞を呼んでいた。

両親を事故で亡くした私を快く引き取ってくれた心優しい熟年夫婦だ。

伯父さんと叔母さんの間には子供がいないので私を実の娘に様に育ててくれた事にすごく感謝している。

でもさすがにずっとお世話になるのは申し訳ないので高校卒業を機会に一人暮らしをしようと密かに計画しているのは、二人には秘密である。

「おはよう」

「おはよう、聖」

「おはよう聖、朝ごはん出来てるわよ」

「はーい、いただきます」

私は席について三人で朝食を食べてから洗面台で左眼に白い眼帯を付けた。

家以外の場所では眼帯をして過ごしている。なんというか他人の眼も気になるが私自身も左眼を隠していないと落ち着かないのだ。

「行ってきます」

そう言ってから家を出ると、すると玄関の前に親友である御加倉命が待っていた。

整った顔立ち、白い肌、腰まで伸びた艶のある黒髪

「聖ちゃん、おはよう」

そして凜と透き通った声。

女の私から見ても“美”がつくほどの美少女で、しかも学校の成績がトップクラスの實力を持っている。

容姿端麗で頭脳明晰、その優しい人柄から別名『姫』と呼ばれ学校中の人気者である。

しかしその容姿からいろんな生徒から告白やラブレターがほぼ毎日届き、その返事を律儀にしているなどすこし抜けている所があると言われているのを本人は知らない。

命とはあることがきっかけで親しく付き合うようになり、今では親友の間柄になっているがそれはまた別の話。

「今日はなんか変な夢見て眼が覚めたんだ」

「へえーどんな夢？」

「・・・えーどんな夢だったっけな・・・」

「忘れちゃったの？」

「うーん、なんだったけな」

そんな会話をしながら私立公符高校へ向かうバス停まで歩いて行った。

バスに乗り込み二人で席に座ろうとした時

「待ってたよ、命」

と背後からその声を聞いて、命の体は固まり、私は眉をひそめた。振り向くとそこには乱れた学生服にワックスで立った金髪の男子学生が通学で混雑しているバスの中の乗客を押しつけて私達の方に歩いてきていた。

広崎圭吾

私立公符高校二年で有名な不良であり、暴力事件を起こして一年留年し年上の力を持って、気にいった生徒を自分のグループに強制的に加えてこき使っているらしい。

命もその圭吾の目に気に入られて何度も交際を迫られている。

まあ何度も振られて追い払われているのだが・・・

「圭吾・・・」

私は命を守るように圭吾の前に立ちはだかった。

「どけよ、聖、おれは命に話があるんだ」

圭吾は鋭い目つきで私を睨みつけた。

「命はあんたに話はないらしいわよ」

「へえ、命が」

そう言うのと圭吾の視線が聖から命に向けられた。

「なあ、命、お前おれと話したくないんだってな」

その低い声に命は身を小さくして肩を震えていた。

「ほら、命はなにも言ってるねーな」

「あんた・・・」

その言葉と人を小ばかにした笑みに

私の何かがキレた。

「・・・おい」

圭吾が私の声に目を向けたその時

「命を泣かすんじゃないよ!!」

その叫びながら圭吾の腹に肘打ちを打ち込んだ。

「がっ!!」

その衝撃で圭吾がバスの床に倒れた時、バスが次のバス停に到着した。

「行くぞ、命」

そう言って命の手を掴みバスから降りた。

圭吾を撃退してバス停に降りた私達は徒歩で学校に向かっていった。

「命、大丈夫？」

「う、うん大丈夫ありがとう、聖ちゃん」

圭吾に脅されて命は少し疲れた表情をして礼を言ってきた。

「・・・またやってしまった、ごめんね、騒がせちゃって」

溜息をつきながらこめかみを押さえ自己嫌悪に陥っていた。

これが中学時代に友人に言われた男勝りな癖である。

これは私自身が頭に血が昇りやすい性格もあるが、自分自身ではどうもコントロールできないでいた。

一応、その癖によって命にしつこく迫ってくる男子生徒を追い払うことが何度かあったが

私の理想とする『普通の女子高生』とは程遠く、学校でも『姫』を守る『騎士』などと自分の名前が有名になり始めている事が最近の悩みである。

「そ、そんなことないよ。私、聖ちゃんに何度も助けてもらって感謝してるよ」

命はそう言って感謝してくれるが、早くこの癖を直さなければならぬと切実に思っている私なのだった。

教室に着くと今朝の騒ぎがもう話題に上がっていた。まあ、通学に使うことが多いバスで起こった事なので仕方がないのだが

「ねえ、聖また圭吾をやったんだってね」

そう言いながら話かけてくるのは私と命の親友の京野智香。

後ろ髪をふたつのおさげにして、活発な子供のような性格の子である。

「さすが『騎士』様、『姫』の事になるとほうっておけないのよね、

今日の見第は決まりだね『騎士様、魔性の手から『姫君』を守る』」
「やめてよ、智香。あいつをほうっておけないのは当然でしょ。それにその『騎士』ってのやめてって言ったでしょ」

ちなみにちなみに私を『騎士』、命を『姫』とあだ名をつけたのは智香だったりする。

智香は命とは小学校からの幼馴染であり、無邪気にいろんな事に首を突っ込む智香を止めるストッパー役をしているのは命の役割である。

「でも、圭吾に肘打ちする度胸は私にはないよ」

「そ、それは・・・」

「それに、命の危険を守っている聖ってかっこいいって思わない命」

「うん、私もかっこいいと思うよ、聖ちゃん」

「命までやめてよね」

私達が『姫』と『騎士』との名称で知られることになったのはちょっととした事件がある。

それは高校入学式の時だった。

入学以前から人気があった命は連日、同級生や上級生に告白されていた。

しかしそれを命はすべて断っていた。

それによって智香が付けたあだ名が「気高き姫君」、通称『姫』だった。

ある日、圭吾が命に無理やり交際を迫りあまりの迫力に泣きそうになっていた時、近くを通りかかった私が命いわくあつという間に圭吾のたちを倒したという、智香いわく『入学式』事件があった。

その事件以降、智香に私は『姫』を守る『騎士』という形になり学校中に定着してしまい、

今では男子生徒より女子生徒の方が尊敬の眼差しで見られていたり、たまにラブレターが入っていたりしかも女子生徒、私の理想『普通の女子高生』とはかけ離れた生活を送っているのだった。

部活

「今日部活参加するよね」

授業が終わり放課後になった瞬間、智香が話かけてきた。

私、命、智香の三人は智香によって写真部にほぼ強制的に入部させられていた。

別に入りたい部活動もなかったのだが・・・

一年の頃どこの部活に入部しようか迷っていると智香に写真部に誘われ渋っていると・・・

「写真を取る女の子って可愛いと思わない」

と智香の口車に乗せられてしまい入部届けに記入してしまった苦い過去がある。

「いいわよ、特に用事もないし」

「私も大丈夫かな」

「よし、じゃあ諸君部室に集合せよ」

智香はすぐに荷物をまとめ教室を出て行ってしまった。

「・・・諸君って、なんの軍隊なのよ」

「聖ちゃん、智香ちゃんの言葉に反応していたらきりがないよ」

「以外に智香に対して冷静なのね、命は・・・」

「伊達に小学校からの幼馴染じゃありませんから」

そんな会話をしながら鞆を持って私達は写真部のある部室に向かった。

部室に向かうと部室のドアの前でカメラを首からかけて立っている男子生徒を見つけた。

新堂昂、私達の一年先輩で写真部の部長をしている。

先輩のはずなのに私達に敬語でかしまった口調で話をする特に特徴のない普通の学生さんである。

「昂先輩どうしたんですか？部室の前で」

「あつ、神埼さん、御加倉さんこんにちは、実は京野さんが・・・」
昂先輩の話によると部室でカメラの準備をしていたら、突然部室に入ってきた智香が昂先輩を追い出して部室に鍵を閉めたらしいのだ。
「まあ、僕は今日もカメラで写真撮影の為に学校を回るからいいんだけど、神埼さん達は突然部室の扉が閉まってたら混乱すると思っ
て待ってたんだ」

昂先輩は困った表情で説明した。

「そうなんだ、ありがとうございます新堂先輩」

「い、いえ、そんな・・・そ、それじゃあ僕は行くよ」

命にお礼を言われ、少し顔を赤くしながら昂先輩は自分のカメラを持ってどこかに行ってしまった。

「それで部長を追い出してまでなにをしてるのかな、写真部の問題児は・・・」

そんな事を呟いた時に部室の鍵が開く音が聞こえた。

「開いたみたいだよ」

「よし、とっちめてやろうじゃないの」

そう意気込みながら部室の扉を勢いよく開けた。

「こら、智香、昂先輩を追い出して一体なにを・・・」

「お帰りなさいませ、ご主人さま」

そこにはおさげを解き肩まで伸びた髪でメイド服を着て、頭にフリルのカーチェンを付けた智香が満弁の笑顔で出迎えられた。

突然の出迎えに私はさっきの意気込みはどこかに飛んでいき訳も分からず止まってしまった。

智香も私が入ってきた事が以外だったらしく笑顔のまま停止し、そのまま数秒間世界の時が止まった。

「なにやってるの？智香ちゃん」

命の言葉により世界の時間が動き出した。

「あ、あれ・・・昂君は？」

再び動き始めた智香は自分で追い出した新堂君を探して私達の後のドアをのぞき探していた。

「なに言ってるの！ 昴先輩、あんたが部室を追い出したから私達に後を任せて一人で写真を取りに行ったのよ！」

「な、なんという事でしよう、せっかくメイド服を着てお出迎えして頂こうと思いましたが、そしてわたくしの満弁の笑顔に悶絶させる完璧な作戦が・・・」

「なにそのしょうもない作戦は、そんな事昴先輩一言も言ってなかったけど」

「そんな事言ったらドッキリにならないじゃないですか」

「じゃあ、もしかして新堂先輩に何も言わないで部室から追い出しちゃったとか？」

命にそう言われた時、智香は一瞬にして凍りついた。

「シマツタ、イイワスレマシタワ」

「バカね」

「うん、アホだね、昴君かわいそう」

「アホとかバカとか言わないでくださいませ！！」

そんな事言われても、あとの祭りである。

「・・・ところで今日はメイド服なんだね、自分で作ったの？」

「そうよ、いかがかしら？」

智香はそう言いながら自慢げに私達の前で一回転してスカートの両端を持ち軽く会釈した。

「うん、かわいいと思うよ」

「まあ、馬子にも衣装とも言うしね」

「それほど言葉として受け取っておきますわ」

そう言いながらお嬢様のような言葉づかいで後髪をかきあげた。

智香は自分のファッションや髪飾りなどを変えることで様々な役柄に変わることができる。

“マインド・チェンジ”と智香は豪語している。

ちなみに、今日はメイド服にフリルのカチューシャでウエイトレス口調だ。

メイド服＋フリルカチューシャ＝ウエイトレスである。

確かに本当に別人のように演じる事が出来るのだが、どうして写真部に入部したのかが疑問だ。

写真部でやってみたい事があったから入部したと言っていたが今のところやりたい事といったら、加賀見市特捜部という広報部のまねごとで、どこから集めてきたのかわからない街の噂の真相を究明しようという新聞なのだが、学校ではオカルト新聞として有名になっている。

「お茶をお出ししますので席にお着きください」

智香にそう言われ、私達が席に着くとほぼ同時に高そうなティーカップの紅茶を入れて出してきた。

智香も含めた三人分に紅茶を配り終わると智香はいつも座っている席に着くとフリルカチューシャを外して黒ぶち眼鏡をかけたもちろんその眼鏡も道具で伊達メガネだ。

「さて、一人部員が足りないがこれより加賀見市特捜部の次回の見出しについての会議を開始したいと思う」

智香がまるで頭の切れるキャリアウーマンのように凛とした声で宣言した。

「特捜部って、いつも思うけどここは写真部で広報委員会じゃないのよ」

「甘い、甘いですよ！ 聖さん」

智香は右手で鼻の頭に指を持っていき眼鏡を上げながら立ちあがった。

「広報委員会は学校の行事や生徒会の決められた事、いや生徒会に指示された事しか記載していない、もはや広報委員会は生徒会の道具のように使われているにすぎない！」

「すごい問題発言だよ、それ・・・」

「しかし私達は違います、学校や街の真実を調べ、それを心の清らかな生徒達に掲示することが我ら特捜員の責務なのです」

「その真実を書き記した新聞が、オカルト新聞として学校中に知れ渡っていることに対してなにか弁明はありますでしょうか智香特捜

員」

命の鋭い指摘に言葉を失っていた。

智香がどう言い訳をしようか考えている時に部室の扉が開き、レディースーツに白衣を着て

背中まで伸びた髪を一つに束ねている目つきの厳しい女性が入って来た。

穂積葉

保険室の先生で、写真部の顧問をしている。

見た目はクールな印象で大人の女性な雰囲気醸し出しているが、実は猫好きで自宅に三匹ほどの子猫を飼っているらしい。

「あっ、先生お茶入れますね」

先生が入ってきたのを発見した智香は逃げるように伊達眼鏡を外してカチューシャを付けお茶を入れ始めた。

「逃げたね」

「逃げたな」

「・・・お二人様お代わりはいかがですか？」

結局、智香のお茶のお代わりと持参していたお菓子を引き換えにして命の指摘は不問となったのだった。

「そう言えば、新堂はどうした？」

智香の紅茶を受け取りながらそう先生が言ってきた。

「智香ちゃんが新堂先輩を部室から追い出してしまったので一人で写真を取りに行っていました」

「ちょ、ちよつと智香！ 先生そ、そ、それは・・・」

紅茶を配り終えて普段の口調に戻った智香が命の説明に怒られると言いつつ慌てていたが、先生はその事に気にしないで紅茶を飲んでいた。

「またお前の勝手で追い出したんだろうが、まあすぐにどこかに行っただろうから、新堂の単独行動は今に始まったことじゃないが気をつけろよ」

「はい、ふう」

智香は怒られずに安堵し額の汗をぬぐった。

「で、今日は何をしていたんだ」

「はい、今日は加賀見市特捜部の・・・」

先生にそう聞かれ智香は伊達眼鏡をかけなおそうとした。

「もうそれはいいから！」

「眼鏡没収！」

私と智香は智香の眼鏡を奪ったり、それに対して智香が数の暴力反対と言ったりと会議とは言いがたい、騒がしい会議があつという間に過ぎて行った。

結局今日の会議では何も決まらずにただ部室で紅茶を飲んで騒いだだけでお開きになった。

「鍵は新堂に渡してあるからお前達は早めに帰ろよ、最近変質者が出没するらしいから誘拐されないようにな」

「はい」

そう言われ私達3人は部室を後にした。

「それにしても変質者ねー私怖くなっちゃう」

制服に着替えた智香がそう言いながら自分の体を抱いた。

「あんたが逆に変質者になったりしてね」

「なんだと、私は他人に迷惑をかけたことなんて一度もないぞ」

「私達にどれだけ迷惑をかけておいてそんな事を言うのはその口か！」

「だって友達は別にいいでしょ」

「それにしても限度があるわ！」

「でも本当に怖いね変質者、私は家遠いし」

「大丈夫だよ、いざとなったら私の家にみんなで泊ればいいんだよ。一人暮らしたし、『姫様』には少し狭いとは思いますが」

「あら、じゃあその時はお呼ばれしようかしら」

「了解ー あっ、『騎士様』も一緒にいいよ」

「なんで私だけそんなついでみたいな感じなのよ」

そんな会話をしながら下校していると携帯が震えた。
見てみると叔母さんからメールが届いていた。

件名…聖へ

本文…さっき買い物に行ってきたのですが、買い忘れたものがあつたの買ってきてもらえないでしょうか？

買い物リスト・・・

そこには買ってきてほしいリストが書いてあった。

「なに誰からメール」

「叔母さんから、買い忘れがあるから買って来いって」

命に聞かれ、届いたメールを見せながら説明した。

「大丈夫？　一緒に行こうか？」

命が心配そうな表情でそう聞いてきた。

「大丈夫、それより命は門限近いんだから先に智香と一緒に帰って」

「そう、気を付けてね」

「ありがとう、命もね」

「『騎士殿』、『姫様』の事はこの騎士代行の智香にお任せ下さい」

「じゃあ、命の事任せたわよ」

「その任務、任せました」

智香は私に敬礼すると命と手をつないで歩いて行った。

私はそれを見送ると買い物をするために商店街に向かった。

「砂糖にみりんにしょうゆ、叔母さんこんなの買い忘れるなんて・・・」

ボケたかなと心配になりながら両手に買い物袋を持ちながら一人住宅街を歩いていた。

明るい商店街から抜けるともう夕日が沈みかけて辺りが薄暗くなっていた。

この買い物だと今日は煮物系かなと夕食の献立を考えながら歩いて

いた。

その時

「動くな」

その太い男の声と共に背中に尖ったなにかを押し付けられた。

左目

頭が真っ白になり、全身が恐怖で硬直した。

その瞬間両手に持っていた荷物を落ちしてしまった。

「！！」

落ちた音に驚いたのか男は背中を押して私を突き飛ばした。

「っ！」

地面に突き飛ばされ、うめきながら体を起こし男の顔を見て言葉を失った。

「あんた、けいご・・・」

そこにはナイフを持って冷たい目で私を見降ろしている圭吾がいた。

「よう、聖待ってたぜ」

圭吾はまるで朝のバスの中で命に声をかけるような口調で私に声をかけてきた。

「な、なにやってるのよ」

私がそう言うのと圭吾はナイフの腹の部分を手で叩きながら近づいてきた。

「お前に散々こけにされたからな、まあ今までのつけを返しに来たということだ」

「つけて・・・」

そんな会話をしながら後に下がり少しでも圭吾から距離を取ろうとしたがお尻を

引きずりながらほぼ腕だけで動いている私と歩いている圭吾とは全然距離は離れることはなかった。

もうパニック状態だ、体が鉛のように重く言う事を聞いてくれない。目からは涙があふれてくる。

ただ、こいつの前で泣くわけにはいかないというプライドだけが涙を流す事を拒否していた。

圭吾は相手が弱い所を見せればそこに付いてくる。だから弱みを見

せる事は訳にはいかなかった。

だからいつものように立ち向かって行った。圭吾がナイフを持っているという事を忘れて。

「そ、そんなのただの逆恨みじゃないの！」

圭吾がナイフをはたくのをやめた。

「へえ、まだそんな強気でいられるのか」

あきらかに圭吾の気配が変わった。

殺される。

そう思ったその時私の背中では家の壁にぶつかって止まった。

まずいと思い、意識を壁のほうに向けた。

その瞬間

圭吾が私の上に覆いかぶさってきた。

「や、ちよつと、やめ、！！」

叫び声を出そうと息を吸い込み吐き出そうとした瞬間圭吾にナイフが私の頬に触れ、呼吸が止まり、声を失った。

ナイフの冷たい感触と圭吾のまるで三日月を切り取ったかのような笑みが私が見える世界に全てだった。

「お前を二度と学校に来られないようにしてやってもいいんだぜ」
「!!!!!!!!!!!!」

頬をナイフの腹で何度も叩きながらそんな事を言っていたがもう私にはそんな事は耳に入っていないかった。

殺される。

もうその事しか頭の中になかった。

ふと、今日の光景は蘇ってきた。

朝の伯父さんと叔母さん

教室と部活で騒ぐ、智香と命

そして・・・夢の中の私そっくりな・・・

その時、私の耳元で何かが、切れる音が聞こえ私の意識は元の世界に戻った。

「えっ・・・」

その私とは思えない声と共に左眼の眼帯が落ちた。

圭吾のナイフで切られたのだ。

私の左眼をみた圭吾は顔を歪めた。

「なんだよ、その左眼、キモチワルイ」

その言葉の刃物が私の心を深く、深くえぐった。

「い、嫌！ 見ないで！！」

私はとっさに左眼を隠そうと手を動かそうとしたが

「動くな！！」

その声と首に伝わるナイフの冷たい感触で動き止めてしまった。

「聖、お前俺を化け物のような目で見ているが、お前の方がよっぽど化け物じゃねえかよ。　なんだよその目、そんな目普通の人間じゃ持ってないんだよ！！」

圭吾から容赦にない罵声が浴びせられる。

“一つ目” “妖怪” “怪物” “化け物”

幼い頃の私はそう言われてからかわれ、いじめられていた。

特に小学校で普通に人とは違う事は子供に対して格好の餌食だった。

悪口、陰口、暴力様々な事をされた。

ただ左眼の視力がないだけで人ではない扱いをされた。

私は人が信じられなくなった。

あの時、区切りを付けたはずなのに

その時、終わらせたはずなのに

なぜ、こんな人間が存在するのだろう、私はお前と同じ人間だというに！！！！

無意識に右手でナイフをつかんでいた。

右手に伝わるのは痛みではなく冷たさだった。

その行動にさっきまで余裕を見せていた圭吾の表情が固まった。

「取り消せ」

人ではない者を見る様な表情をしている圭吾の目を見据えて叫んだ。

「化け物を言った事を取り消せ！！！！」

その叫び声に弾き飛ばされように圭吾は後に下がった。
立ち上がり右手を確認する。

思わず掴んだが傷はそこまで深くはないが傷口から血が浮かんでいた。

ポケットからハンカチを出しきつく巻いた。

痛みはあったがその痛みで頭がパニックにならずに冷静になった。

「さあ、化け物といったのを取り消してもらおうか、圭吾」

「ば、ばけもの」

圭吾はさっきまでの態度が嘘のように狼狽し、逃げ腰になっていた。

「まだ言うかテメエは!!!」

そう叫びながら、殴ろうとした時

向こう側から制服を着た男子学生が歩いていた。

それを見た圭吾は小さく笑みを浮かべ、男子学生に向かって走り出した。

「逃げろ!!!」

そう叫びながら圭吾を追おうとした。

その瞬間、左眼に焼けるような痛みが走った。

「ぐっ!!!」

その痛みに左手で目を覆った。

その時

「ぎゃあああああ!!!」

圭吾の断末魔の叫び声が響きわたった。

「なんだ」

その声に気を取られていると左眼の痛みは治まっていた。

急いで叫び声の方に向かうと自分の目を疑う光景が広がっていた。

そこには制服を無数に切りつけられ地面に倒れて恐怖で震えている圭吾と圭吾を見下ろしている全身ナイフのような刃物で覆われた化け物がそこに立っていた。

「な、なんだこれ・・・」

その声にナイフ男はこっちを向いた。

「あ、あああああ!!!!」

圭吾はその隙について獣のような叫び声を上げながら逃げ出していた。

ナイフ男は圭吾が逃げて行った方向を首だけ向けたがすぐにこちらの方を向いて歩いてきた。

ナイフ男が歩くと金属がこすり合う嫌な音が響いた。

「なんなんだ、お前は・・・」

そう呟くとナイフ男聞こえていたように答えた。

「どうして・・・」

「どうして？」

ナイフ男の言葉に耳を傾けようとしたしかし

「見つけたぞ」

ナイフ男の後から聞こえる男の声に遮られた。

そこには死神が持つ鎌のような黒い刃物が黒い左腕からはえた男が立っていた。

その男はナイフ男をまるで人間ではない者をみるような冷徹な目で睨みつけ、こちら側に走りだした。

「!!!!」

黒い腕の男を見たナイフ男はまるで宿敵を見つけたように黒い腕の男の方に走りだした。

そして黒い左腕の鎌とナイフ男の刃物に覆われた右腕がぶつかり合った。

「!!!!!!」

ナイフ男が黒い腕の男に殴りかかるがその攻撃をわかっていたかのように紙一重でかわし鎌を振るい。

右腕を切り落とした。

「!!!!!!!!!!!!」

ナイフ男から声にならない絶叫が辺りに響きわたった。

しかし血が吹き出る事なく刃物に覆われた右腕はただ物のように地

面に転がっていた。

右腕を切り落とされた事で戦意を喪失した様でナイフ男は地面に膝をついてうなだれ、その姿を黒い腕の男は見下すような目で見て、黒い鎌を構えた。

その姿はまるで罪人の首を跳ね飛ばす処刑人のような雰囲気醸し出していた。

「どうして・・・こんなことに・・・」

ナイフ男は先ほどと同じ言葉を呟いた。

「・・・お前が弱いからだろ」

黒い腕の男がそう答えた瞬間、ナイフ男の首に黒い鎌が振り下ろされた。

首のなくなったナイフ男はその場にゆっくりと倒れ、二度と動く事はなかった。

ナイフ男の死を確認した黒い腕の男はこちらを見た。

背筋が震えあがった。

黒い腕の男の目は殺意に満ち、少しでも動けばナイフ男のように首を切り取られると思った。

黒い腕の男は鎌を構えながらゆっくり近づいてきた。

その恐怖に自然と黒い鎌に視線が向かってしまった。

「お前・・・視えているのか？」

「え？」

黒い腕の男の問いに答える前に私の意識は切り落とされた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9034n/>

鏡界線上の向こう側 第1章

2010年10月11日21時43分発行